



No.158

2023.7.20

兵庫県立神戸商業高校

図書館

新着図書紹介

## はじめよう読書習慣！

誰でも多かれ少なかれ好奇心と疑心を持ち合わせているもの。そしてそれらを確認めようとする時、ネットやAIではなく書物の中から納得する答えを導いてみませんか。生きた知識を集め、人生を豊かにするのが書物です。夏休み この機会に始めてください、読書習慣。



### 『齋藤孝先生が選ぶ高校生からの読書大全』

齋藤 孝【著】

古典作品や哲学書を読破するのはハードルが高くてたやすくはありません。本書を入り口として作品の魅力に触れ、日本と世界の名著名作をみずから読むきっかけにもなる。調べ物学習にもおすすめ。

### 『黄色い家』

川上未映子【著】

十七歳の夏、親もとを出て「黄色い家」に集った少女たちは、生きていくためにカード犯罪の出し子というシノギに手を染める。人はなぜ罪を犯すのか。世界が注目する作家が初めて挑む、圧巻のクライム・サスペンス。

### 『いちにち、古典—“とき”をめぐる日本文学誌』

田中 貴子【著】

誰にも等しく訪れる一日という時間を、見ぬ世の人々はいかに過ごしていたのだろう。古典文学のなかの「とき」に眼を凝らし、そこに息づく人々の生きざまや感性を活写する。時を駆ける古典入門！

### 『巨大おけを絶やすな！—日本の食文化を未来へつなぐ』

竹内 早希子【著】

しょうゆ、みそ、酒など、日本の伝統調味料づくりに欠かせない日本固有の巨大な木おけをつくれる職人がいなくなる。最後の職人に弟子入りし、次々に降りかかる無理難題をクリアして、おけづくりの輪を全国に広げた奇跡の奮闘記。

### 『データで読む地域再生—「強い県・強い市町村」の秘密を探る』

日本経済新聞社地域報道センター【編】

“人が集まる地域”“魅力ある自治体”はどんな取り組みをしているのか？出生率や人口増減率に始まり、女性登用、農業生産性、災害対応力、道の駅の数、アニメの聖地まで、社会課題解決に成功した県・市町村の成功事例を紹介。

### 『この夏の星を見る』

辻村 深月【著】

コロナ禍による休校や緊急事態宣言、これまで誰も経験したことのない事態の中で大人たち以上に複雑な思いを抱える中高生たち。しかしコロナ禍ならではの出会いもあった。リモート会議を駆使して、全国で繋がっていく天文部の生徒たち。



### 『君は君の人生の主役になれ』

鳥羽 和久【著】

学校や親が重くてしんどい人へ。先生・友達・家族、そして、勉強・恋愛・お金…。いま悩める十代に必要なのは、君自身が紡ぐ哲学だ。



## 『とにかくかわいいときめきスイーツ』

Ai Horikawa【著】

SNSで大人気のAi Horikawa (@ai\_mogmog)、待望の初レシピ本。「作ってみたい!」「かわいすぎる!」と話題の厳選スイーツたちを1冊にまとめました。

## 『ビジネスと人生に効く教養としてのチャップリン』

大野 裕之【著】

世界中で愛される喜劇王チャップリン。監督・脚本・主演・作曲とマルチなクリエイターであると同時にウォルト・ディズニーにビジネスを教えた師匠でもあった。移民や人種差別、格差社会メディアの炎上、同性愛やダイバーシティ、そして戦争。現代の諸問題への解決法を数々の作品からコメディを通して学ぶことができる。

## 【その他の新着図書】

日経キーワード〈2023・2024〉	日経HR編集部	社会学
君たちが生き延びるために—高校生との22の対話	天童 荒太	文学
ドイツ人はなぜ、年収アップと環境対策を両立できるのか	熊谷 徹	環境
医の変革	春日 雅人	医学
さらば、男性政治	三浦 まり	政治
超デジタル世界—DX、メタバースのゆくえ	西垣 通	情報
ネット情報におぼれない学び方	梅澤 貴典	知識
世界の片隅で日本国憲法をたぐりよせる	大門 正克	憲法
がらんどう	大谷 朝子	文学
うたいおどる言葉、黄金のベンガルで	佐々木 美佳	文学
新・音楽とキャリア—音楽を通じた生き方働き方	久保田 慶一	音楽
隣人のあなた—「移民社会」日本でいま起きていること	安田 菜津紀	移民
「情報自由法」で社会を変える!—情報開示最強ツールの実践ガイド	ミツチェル, ジョン	行政
大学学部調べ 体育学部・スポーツ科学部	山下 久猛	教育
医療事務スタッフになるには	笹田 久美子	医療

環境省レッドリスト 日本の絶滅危惧生物図鑑	岩槻 邦男/ 太田 英利	生物科学
ザ・ミュージアム—世界の知と美の殿堂	オーウェン	博物館
月の立つ林で	青山 美智子	文学
ChatGPT対話型AIが生み出す未来	古川 渉一	情報
墨のゆらめき	三浦しをん	文学
戦物語	西尾維新	文学
岸辺露伴ルーヴルへ行く	荒木飛呂彦	コミック

ぶらり選書 2学年 井上先生

『秘密』 東野 圭吾著

本来、教員がこのような文章を書くとなると、教育につながるものや教訓になるような話にするのだろうが、少し違う趣向で書いてみたい。

東野圭吾氏の作品を私はよく読むが、その中の一作、私は彼の作品で最も印象に残るものだと思っている。『秘密』というタイトルを聞いたら聞いたことがある人もいることと思う。

杉田平介は妻・直子と11歳の娘・藻奈美との3人暮らし。ある日、直子と藻奈美は実家に向かっていたが、乗っていたバスが転落事故に遭う。直子の肉体は助からなかったが、自分の身を呈して守った娘は奇跡的に助かる。しかし、目覚めた藻奈美の肉体に存在したのは直子の精神であった。それから平介と藻奈美の身体に宿った直子はこのことを周囲に伏せ、戸惑い、不安、衝突を繰り返して生きていく。

やがて、数年が経ち、消えていた藻奈美の精神が現れだす。藻奈美と直子の精神が交互に入れ替わる中、徐々に直子の精神が現れる時間は短くなり、ついには消滅する。

そして、藻奈美が結婚する時を迎え…。

この生活そのものがタイトルの『秘密』なのかと思いきや、それどころかとんでもない『秘密』がこの後明らかになる。私は結末を読んだ時、初めて「心臓が痛い。」という感触を覚えた。

昨今、ネットワークの発達を言い訳に人間関係が希薄になったとか、自分のことを先行させ、他人を思いやる心がなくなったとか、何かの判断の機に周囲や全体のことを考えてできなかったりということをよく聞く。そんな世知辛い世の中で、果たしてこんな生き方を選ぶことができる人間がいるのだろうか。

と言っても、私が何度も繰り返し読み返した結末をここでは語っていない。ぜひ、この結末を自分自身で読んで、心臓の痛みを感じてもらいたい。